

第14図 昭和59年度 平城京内発掘調査地点図

昭和59年度 平城京内発掘調査地一覧

調査次数	調査地区		面積㎡	調査期間	備考	発掘担当者
156-18	左京二条三坊三坪	法華寺町205-1	400	84. 8. 17 - 9. 22	杉本政春宅	高瀬 要一
-22	〃 二条三坊六坪	法華寺町190-1	180	84. 11. 8 - 11. 20	本田義美宅	松村 恵司
※158	〃 二条六坊十二坪	北魚屋西町	610	84. 7. 4 - 8. 16	奈良女子大学	森 郁夫
※156- 4	〃 三条三坊三坪	大宮町7丁目1	139	84. 4. 23 - 5. 1	関西電力 奈良変電所	深澤 芳樹
-17	〃 三条四坊四坪	大宮町3丁目204-1	176	84. 8. 1 - 8. 13	大同建設㈱	橋本 義則
- 6	〃 四条二坊一坪	四条大路1丁目甲814-1	760	84. 5. 4 - 5. 24	渡文㈱	金子 裕之
※ - 8	〃 四条二坊十五坪	四条大路1丁目762	750	84. 5. 22 - 6. 29	西口利夫宅	岩永 省三
-27	〃 五条二坊一坪	大安寺町559他	480	84. 12. 13 - 12. 27	染川幸三宅	松村 恵司
-33	〃 五条五坊九坪	大森町39-1 他	350	85. 3. 4 - 3. 27	稲田病院	杉山 洋
※160	〃 八条一坊三・六坪	杏町197-1	3,300	84. 8. 7 - 10. 26	スギノテクノ㈱	毛利光俊彦
156- 2	〃 九条一坊三・六坪	西九条町5丁目4-8	270	84. 4. 2 - 4. 7	油谷鉄工㈱	宮本長二郎
※ -14	〃 九条大路	東九条町722-3	90	84. 7. 4 - 7. 6	奈良県 浄化センター	毛利光俊彦
※ -23	〃 九条大路	東九条町・北之庄町	886	84. 11. 7 - 11. 28	奈良市都市計画課	山本 忠尚
※ -11	右京北辺四坊	西大寺室ヶ丘776-1	15	84. 6. 22	吉見良三宅	山崎 信二
※ -26	〃 一条二坊一坪	佐紀町15-1	39	84. 12. 13 - 12. 15	中川勝宅	綾村 宏
※ - 1	〃 一条二坊五坪	西大寺柴町2296-1	187	84. 4. 2 - 4. 9	ダイワビル㈱	金子 裕之
※ -21	〃 二条二坊八坪	西大寺芝町2106	70	84. 10. 11 - 10. 18	上田明宅	西 弘海
-10	〃 二条三坊十二坪	菅原町字油242他	1,340	84. 6. 11 - 7. 5	三和住宅㈱	深澤 芳樹
162	〃 三条三坊 四・五・六坪	宝来町64	1,820	84. 11. 21 - 12. 25	奥村ハウジング㈱	西 弘海
※156-15	〃 五条三坊十二坪	五条町字西山691他	35	84. 7. 20 - 7. 23	松久保秀胤宅	毛利光俊彦
-32	〃 八条一坊十四坪	大和郡山市九条町132他	324	85. 2. 20 - 3. 2	大和郡山市	千田 剛道
※ - 9	興福寺境内	東向中町5-1 他	10	84. 5. 25 - 5. 26	浅川 ハーベストビル㈱	宮本長二郎
-25	元興寺境内	中院町5-1	17	84. 11. 16 - 11. 19	紀藤好昭宅	西 弘海
-28	〃	中院町4	31.5	85. 1. 7 - 1. 10	木村惣一宅	工築 善通
次数外	薬師寺境内	西の京町字寺内	1,000	85. 1. 16 - 4. 27	薬師寺	上野 邦一

※は本文には収録せず。巻末「その他の発掘調査一覧」参照。

店舗建設に伴う事前調査である。調査地は法華寺町の国道24号バイパス北側の水田であり、三坪の南辺中央部にあたる。調査地南東の一段高い畑は、三坪と四坪間の坪境小路の遺存地割と考えられている。従って本調査では小路の検出と三坪内の様相を確認することを主たる目的とした。

発掘区の層序は上から黒色腐植土（耕土）、黄灰色砂質土（床土）、淡灰色砂質土、赤褐色砂質土、灰色粘質土、暗灰色粘質土（遺物包含層）、青灰色粘質土（地山）の順である。耕土上面から地山面までの深さは1.1～1.3mとやや深い。発掘区の北から約 $\frac{1}{3}$ の範囲には地山上に厚さ5～10cmの砂が堆積しているが、これは平城京造営以前の川の氾濫によるものである。遺構はこの砂を含めた地山上面と、暗灰色粘質土上面で検出したが、地山上面で検出した遺構は重複し、さらに2時期に分かれる。以下、古い方からA期、B期、C期とし、その概要を記す。

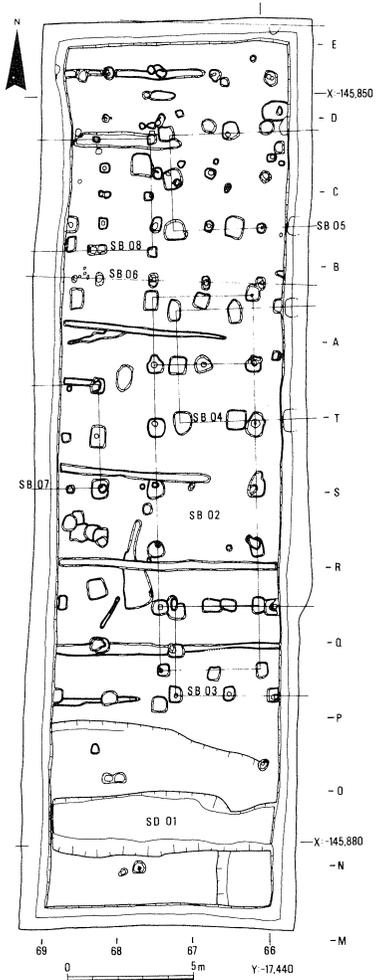
**A期** 溝1条と建物3棟がある。発掘区南部で検出した素掘りの東西溝S D 01は、幅2.4m、深さ0.4mで、溝の堆積土は上下2層に分かれる。上層は黒色粘質土からなり、奈良時代後半期の土器等を含む。下層は灰色粗砂を主とし、奈良時代前期の土器を包含する。下層溝がA期のS D 01 Aにあたり、上層溝がB期のS D 01 Bである。位置および年代から、坪境小路北側溝と推定した。S B 02は発掘区中央の南北棟掘立柱建物である。梁行2間、桁行6間で、柱間寸法は梁行2.0m（6.8尺）等間、桁行は中4間が2.4m（8尺）等間で、南北両端がそれぞれ2.5m、2.7mと広がる。この広がった両端の棟通りには1間内側にも柱穴がある。この柱穴は側柱と同大の掘形・柱痕跡があり、かつ柱間寸法が広いことから、身舎の妻柱と考えられる。つまり、この建物は南北棟の両妻に廂が付く。S B 07・08はいずれもS B 02に柱筋を揃える掘立柱建物である。建物の一部を検出したにすぎないが、両者とも東西棟の可能性が高い。東西棟建物ならばS B 07はS B 02の南から3間目の柱筋に南側柱筋を揃える建物で、梁行の柱間寸法は2.0m（6.8尺）等間であり、S B 02と同規模になる。同じくS B 08は東妻柱筋をS B 02の西側柱

筋に揃える建物で、柱間寸法は梁行2.25m（7.5尺）等間、桁行2.4m（8尺）である。

**B期** 3棟の建物と前述の東西溝上層S B 01 Bがある。3棟はすべて東西棟掘立柱建物で、西妻柱筋を揃え整然と建ち並ぶ。南からS B 03・04・05であり、いずれも梁行は2間であるが、桁行は2間分を検出したにとどまる。柱間寸法は建物ごとに多少異なるが1.8m（6尺）から2.25m（7.5尺）の間である。

**C期** 発掘区北部の総柱建物（S B 06）1棟がある。遺構は暗灰色粘質土上面から掘り込まれている。暗灰色粘質土には大量の遺物が含まれ、その多くは奈良時代の土器や瓦片であるが、同時に平安時代の黒色土器・灰釉陶器や、鎌倉時代に降る信楽焼等も含まれていた。従って、S B 06は鎌倉時代以降の建物である。東西は4間分、南北は5間分確認したが、さらに発掘区外に続くであろう。

以上のように今回の調査では、三・四坪間の坪境小路北側溝を検出するとともに、三坪の土地利用の一端を明らかにした。三坪は東二坊大路に面し、平城宮に近接した位置にあることから、高位の貴族の邸宅が営まれていたと推定できるが、今回検出したA期、B期の奈良時代に属す建物群は、それを裏付けるような整然とした建物配置であった。しかし、これらの建物はその大きさや配置から見て、宅地の中核を構成するものではなく、付随する雑舎群であろう。また、発掘区北部にかかるS B 06は総柱であること、規模が大きいこと、柱掘形底に玉石を据えることなどの特徴をもち、その性格を明らかにし得ないが、中世における平城京跡の姿を考える上で重要な手がかりになる遺構である。



第15図 左京二条三坊三坪発掘遺構図

法華寺町における自動車販売店建設に伴う事前調査である。調査地は、先に実施した第156—18次調査地の3筆東の水田で、六坪の中央南端部にあたる。南北18m、東西10mの調査区を設定したが、第156—18次調査検出の坪境小路北側溝は調査区南7mの敷地外に位置する。調査区の基本層序は、現地表から客土、旧水田耕土、床土、灰褐色砂質粘土、灰色粘土の順であり、地表下1.2mで奈良時代の遺物を包含する暗灰色粘土層に達する。遺構は遺物包含層直下の暗褐色粗砂層上面（地表下1.4m）で検出した。遺構検出面は佐保川の氾濫原の最上部にあたり、軟弱な細砂層が検出面下に厚く堆積する。検出した遺構は掘立柱建物11棟、土壇2基、井戸1基、自然流路2条などであり、遺構の重複関係・方位・出土遺物から、弥生時代以降中世に至る6期の遺構変遷をとらえることができる。

**A期**（弥生～古墳時代） 調査区の北端と中央部に2条の自然流路S D 01・02が存在する。深さは0.6m前後で、南東から北西に向って流れる。流路内に堆積する砂層からは、畿内第V様式の弥生土器と布留式土器が出土。奈良時代以降の遺構は、この流路上に構築される。

**B期**（奈良時代前半） 掘立柱建物S B 03・04・05、土壇S K 06が存在する。建物の方位は北でわずかに西に振れ、平城京の条坊方位に近い。S B 03は3間×2間の南北棟で、柱間は桁行・梁行ともに6尺等間。S B 04はS Bの西10尺に位置する東西棟の東妻部分である。6尺等間でS B 03と北側柱筋がそろろう。S B 05はS B 03と東側の柱筋をそろえた2間×2間以上の南北棟。柱間は桁行・梁行ともに9尺等間である。S K 06は深さ0.1m前後の浅く不整形な土壇で、B期の建物解体後に掘られた塵芥処理用の土壇とみられる。土壇内からは平城宮Ⅱの土器が出土。

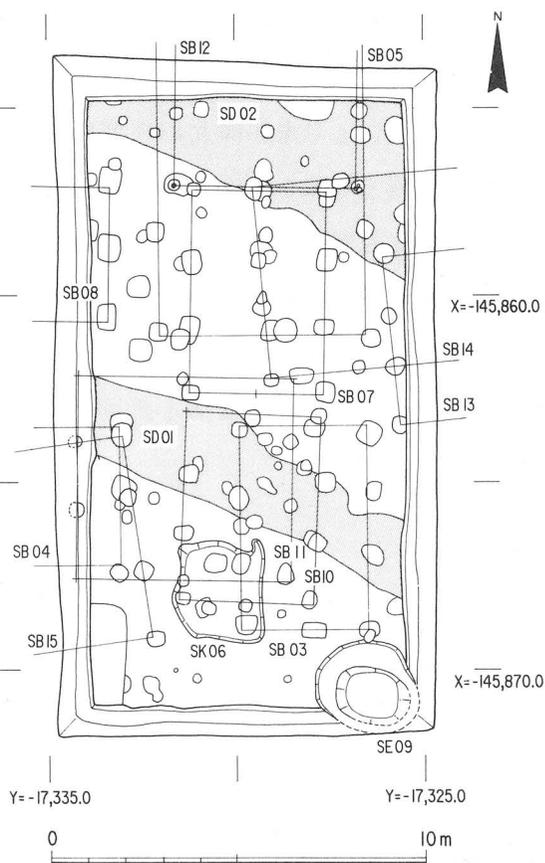
**C期**（奈良時代中頃） B期の建物配置を踏襲したまま、北方に掘立柱建物を建て替える。掘立柱建物S B 07・08はS B 03・04と同規模であるが、いずれも矩形の柱掘形に変わる。建物の北への移設に伴い、調査区の南東隅に井戸S E 09が掘られる。S E 09は2.5×2.0m前後の掘形をもつ2段掘りの井戸で、検出面からの

深さは1.1m。底面は湧水の激しい粗砂層に達する。井戸枠は抜取られ遺存しない。底面には栗石が敷かれ、井戸底近くから曲物底板や箸状木製品とともに平城宮Ⅲの土器が一括出土した。また井戸枠抜取穴上部からは平城宮Ⅴの土器が出土し、抜取りは奈良時代末頃の仕事とみられる。

**D期（奈良時代後半）** 3間×2間の南北棟建物S B10が1棟のみ存在する。建物方位は北で東へ3°近く振れる。北西隅柱穴は検出できなかったが、柱間は梁行が6尺等間、桁行は5.5尺等間である。B期の土壌・柱穴を切って構築されており、前後の時期から奈良時代後半期の建物と考えられる。

**E期（平安時代）** 柱掘形が小さく、柱間の広い掘立柱建物S B11・12がこの期に属する。S B11は梁行3間6尺等間、桁行2間以上10尺等間の建物で、調査区の西壁に東側柱に対応する柱穴2個を確認したが間仕切の可能性が高く、さらに西に延びる東西棟になろう。S B12は2間×2間以上の南北棟。南妻柱は中世の柱穴で破壊される。梁行8尺等間、桁行柱間は7尺である。一部に柱根が遺存し、栗石による根固めがみられる。

**F期（中世）** 北で西へ大きく振れた3棟の掘立柱建物S B13～15が該期に属する。S B13は5尺等間の柱穴3間分を検出した。柱掘形埋土から中世の羽釜片が出土。S B14はS B13と重複する建物で、南北の柱間は3間5.5尺等間、東西柱間は8尺である。建物の形式がE期のS B11に近似する。S B15も6尺等間の柱穴を3間分確認した。



第16図 左京二条三坊六坪発掘遺構図

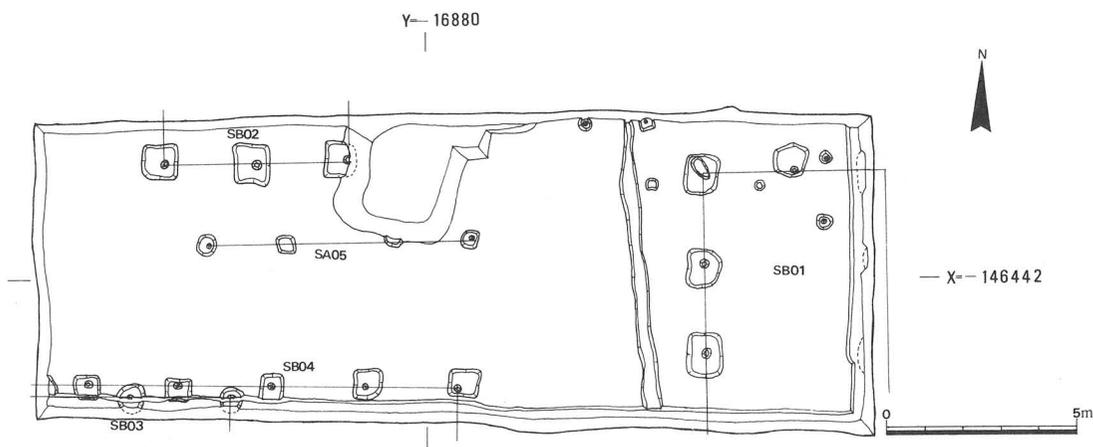
### 3 左京三条四坊四坪の調査

第156—17次

本調査はマンション建設に先立つ事前調査である。昨年、本調査区の北で四坪北東辺を調査（第151—18次調査）し、三・四坪坪境小路と南側溝を検出、さらに四坪内の状況の一端をも明らかにした。今回は昨年度の調査で検出した遺構と関連した遺構の検出を目的とした。主な検出遺構は掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条等である。耕土・床土下の黄灰褐色及び黄茶褐色の2層の砂質土面で縦横に走る多数の溝を、また奈良時代の遺構はその下の青灰色粘質土面で検出した。

掘立柱建物S B01は桁行3間以上、梁行2間の南北棟。柱間寸法は8尺等間。北妻の棟通りの柱穴を断ち割ったところ、掘形南寄りで柱痕跡直下に礎盤と思われる木質が残存。S B02は2間分を検出。南北棟の南妻柱列にあたるか。検出した2間の柱間寸法は8尺等間。S B03は2間を検出。柱間寸法は9尺等間。S B04は桁行5間以上の東西棟北側柱列にあたるか。柱間寸法は8尺等間。S A05は掘立柱東西塀で3間を検出。柱間寸法は中央が9尺、両端が7尺。

S B01の柱掘形・抜取穴から奈良時代中頃以降・後半の遺物が出土、黄茶褐色砂質土層から新しい時代のものを混じえない奈良時代後半を主体とした遺物が出土したこと等から、今回検出した遺構は奈良時代後半に属すると考えられるが、昨年度の調査で検出した遺構と直接関連する遺構については検出できなかった。



第17図 左京三条四坊四坪発掘遺構図

## 1 調査の概要

本調査は、ホテル建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は標記の坪の中央北寄りのところで、調査地の西南に接して昭和58年度に発掘調査を実施した植田商事株式会社がある（第151 - 1次調査、以下第一次調査区と称す）。調査対象は、当初三条通りに面した倉庫跡地であったが、南に接する水田を駐車場として使用することが急拠決まり、北側の調査が終了した段階で南側に発掘区を拡張した。発掘面積は約760㎡、調査期間は昭和59年5月4日から5月24日までである。

**層位** 発掘区北側の倉庫跡地は水田耕土の上にガラを約1m盛土していたが、その他のところでは水田耕土（15cm）、床土（15cm）、黄褐色粘土ないし茶褐色粘質土と移行する。遺構はすべてこの黄褐色粘質土ないし茶褐色粘質土層の上面で検出した。遺構面の最高所は海拔59.5m前後である。遺構面から約1.5m掘り下げて土層を観察したところによると、この黄褐色粘質土は次第に砂粒分を多く含み、以下粘土層と細砂層が互層状に堆積し、1m以下は灰色荒砂層へと移行した。この間遺物はなく、これらの層が堆積した年代を知ることはできなかった。

## 2 遺構の時期区分

検出遺構は掘立柱建物8棟、掘立柱塀4条、溝2条、土壇などである。遺構は、遺物や遺構の状況から、奈良時代以前と奈良時代3期の合わせて4期に区分できる。

以下、時期ごとに遺構の概要を述べよう。

**奈良時代以前** 溝1条と土壇1基がある。S D 3006は発掘区の南端付近にある。やや隅丸形状に曲る溝で、総長19m分を検出した。溝幅は、約0.4m、検出面からの深さが0.1mである。一部が南北棟S B 3007の柱穴と重複する。この溝の年代を決める遺物はないが、同様の埋土をもつ溝S D 2593・2594が第一次調査区の西南隅にあり、古墳時代の土器が出土している。南北棟S B 3008の身舎部分で検出したS K 3022は、径が0.5m、深さが0.2mの小土壇で、古墳時代の高杯破

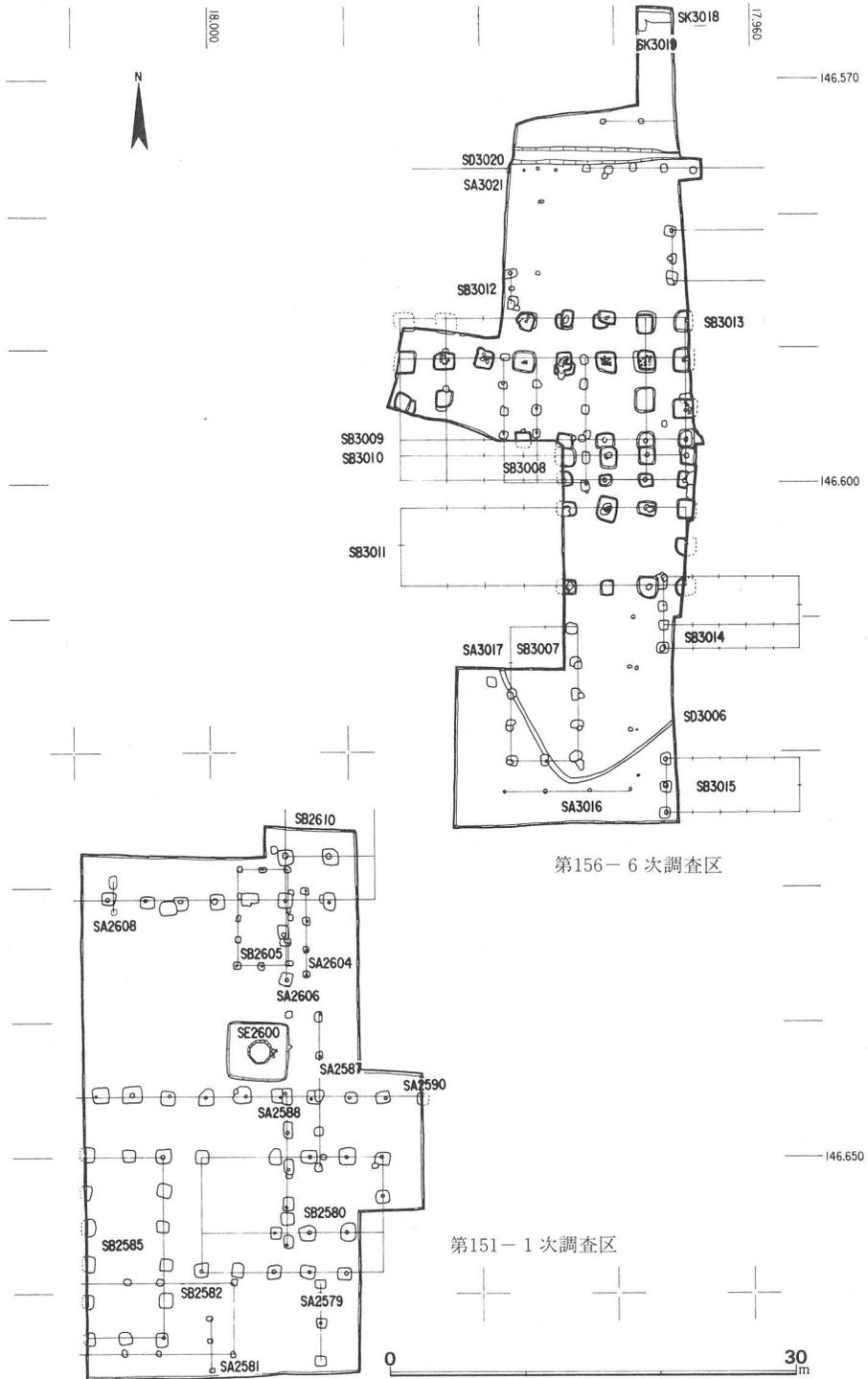
片が出土した。なお、関連遺構は未検出だが、第一次調査区と同様に本調査区でも埴輪片が出土している。付近に古墳があったのであろうか。

**奈良時代前半** この時期の遺構には、掘立柱建物5棟、塀2条がある。S B 3007は、4間2間の南北棟建物。柱間は2.5 m（8.3尺）等間で、柱はすべて抜き取っている。S B 3014・3015はともに妻柱のみの検出だが、S B 3007と一体となる東西棟と考えるもの。両建物の妻は、S B 3007の妻から東9 m（30尺）に位置する。S B 3014は南廂があり、廂の出が2.1 m（7尺）、梁行が1.5 m（5尺）等間。S B 3015は梁行が2.1 m（7尺）等間である。ともに柱の抜き取痕跡がある。S A 3016はS B 3007の南2.2 mにある東西塀。3間分を検出、柱間は3 m～3.2 mである。柱掘形が小さく、塀以外の機能を考えるべきか。

S B 3008は4間3間、西廂をもつ南北棟建物。北の妻柱は、のちのS B 3009・3010により破壊されている。柱間は桁行と身舎の梁行が1.8 m（6尺）等間、廂の出が2.4 m（8尺）である。柱穴には抜き取痕跡がある。西側柱筋は、ほぼ一坪の東西2等分線上にある。S B 3013は妻柱のみの検出だが、S B 3008と一体の東西棟と考える。側柱の掘形はかなり大きい、妻柱のそれは小さく浅い。また梁行寸法も北から1.7 m、2.1 mと不等である。S A 3012は2間の南北塀。柱間は1.2 m（4尺）等間。

この時期の年代を決める遺物は、平城宮 I の転用硯がS B 3007の柱穴から、奈良時代前半期のやはり転用硯がS B 3015の妻柱穴から、それぞれ出土した。

**奈良時代中葉** この時期の遺構は建物1棟、溝1条である。S B 3009は7間4間の四面廂東西棟建物である。柱掘形は、一部が同じ位置に建替えたS B 3010の柱穴と重複するが、一辺が身舎部分では0.7～0.8 m、廂では0.5～0.6 mである。柱間は桁行・梁行とも3 m（10尺）等間である。S B 3009の東西の中心は、一坪の東西2等分線の東3 m（10尺）にある。また棟通りは坪の北から33 m（110尺）の位置にあり、その位置と建物規模からみて、この坪の中心的建物であろう。S D 3020は坪の北から15 m（50尺）南、S B 3009の棟通りから18 m（60尺）北にある東西溝。位置からみて、坪の北辺を画す坪内道路の側溝であろうか。幅0.7 m、



第18図 左京四条二坊一坪発掘遺構図

深さ0.5 m、6 m分を検出した。

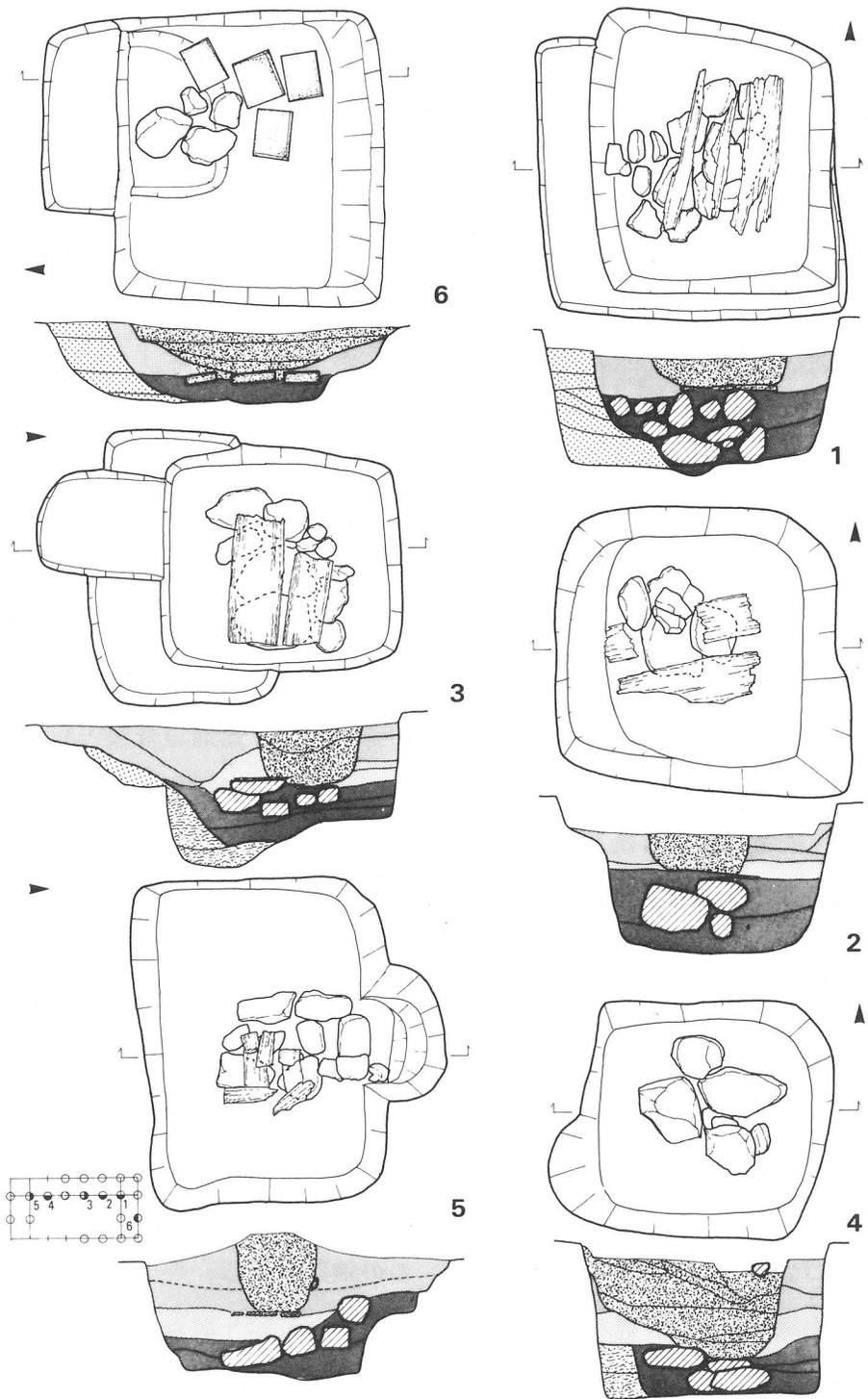
この時期の年代は、S B 3009の北入側柱から平城宮Ⅱ（730年頃）ないしⅢ（750年頃）の土器が出土したので、これを上限年代とみることができる。

**奈良時代後半** 建物2棟と塀1条がある。S B 3010はS B 3009と同位置に建替えた7間3間の東西棟で、南を除く三面に廂をもつ。柱間は桁行と廂の出がS B 3009と同様に3 m（10尺）等間だが、身舎の梁行部分が3.6 m（12尺）等間である。両方の建物は北側柱筋が一致するため、北側柱と入側柱の柱穴は完全に重複している。S B 3010の柱掘形は一辺が1.5 m前後と大きく、また一部で特殊な地業を行っている。つまり、典型的な例でみると、柱掘形を一度深さ0.8 mまで掘り下げ、途中まで版築状につき固めながら埋め戻し、根石をいれる掘形を再度掘って玉石をいれ、その上に木の礎盤を敷き、柱を立てるものである（第19図）。この場合根石をいれる掘形を、抜取穴のように柱掘形の外側から掘りこむ例（第19図5・6）や、根石の代わりに塼を入れこむ例（第19図4）などがある。柱穴はすべて抜取痕跡がある。上の工法は北の入側柱筋、側柱筋に顕著で、南側柱筋ではみられないようである。

S B 3011は、7間2間の東西棟建物で、柱間は桁行、梁行とも3 m（10尺）等間で、S B 3010と柱筋を揃える。柱掘形は一辺0.8 mから1.8 mの超大型のものまでであるが底は浅く、柱位置には玉石を敷き礎盤としている。SB3010と同様、この玉石の上に木の礎盤をおいた可能性もあるが、掘形の底が乾燥していたためか木の礎盤の痕跡は見い出せなかった。各柱穴には抜取痕跡があり、一部の玉石を掘り起したり、完全に抜き取っていた。

S B 3011とS B 3010との間隔は3.9 m（13尺）。2棟の建物は柱筋を揃えることや柱の立て方に共通性のあるところから一連であろう。建物の間隔が13尺と狭いのは軒を接して2棟を一体化し、広い室内空間を確保する方法である。このように大型の建物を南北に並列し、全体をひとまとまりの殿舎にする方法は、奈良時代後半の平城宮第一次大極殿地区の前殿・中殿・後殿（SB6610・SB6611・SB7150）にみられる。

S B 3010の北にある東西溝S D 3020に接して東西塀S A 3021を設ける。この塀



第19図 S B 3010の柱穴地業図

はSB3010の中軸線上にあたる東西3 m分が途切れており、その間に2間分の小さな柱掘形がある。溝に渡した橋の跡か、簡単な門のような施設があったのであろう。

この時期を奈良時代後半としたのは、SB3010がSB3009の建替・拡張であることによる。この建物の柱抜取穴から黒色土器風の土器が出土しているので、この時期の下限は平安時代初期に降る可能性がある。なお、北側柱の柱抜取穴から三彩陶器片と、軒丸瓦6308 A（瓦編年のⅡ期）が出土している。

まとめ 本調査区の遺構とその配置を述べたが、それらは奈良時代の前半と中葉以降とで大きな違いがある。こうした変化は本調査区のみによる現象か、一坪全体に及ぶのかをさらに検討するために、第一次調査区の成果ともあわせ、再度考察することにしよう。

### 3 一坪の宅地割と変遷

ここで、本調査の成果と第一次調査の成果を合わせ、一坪の宅地割を考えてみよう。第一次調査の成果は、『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所 昭和59年 以下単に報文と略す）として公刊している。この調査で検出した遺構も本調査と対応する4時期に区分できるので、両調査区をあわせた奈良時代の遺構と宅地割の変遷を検討する。なお、上の報文で推定した建物配置は、以下に述べる如く、本調査の成果によって大幅な修正が必要となった。

一坪の規模 宅地割を論ずる際の前提となる一坪の規模について、まず述べておこう。従来の京内調査と遺存地割の計測とによって、平城京条坊の計画寸法は1800尺（令制1里）であること、この基準尺は1尺=0.295～0.296 mであることが判明している。坪の計画寸法は450尺であるから、坪の南北・東西の規模を求めるのは、ここから三条大路と一坪・二坪の坪境小路、東一坊大路と一坪と八坪の坪境小路の幅員の½を各々減じればよい。この道路のうち、東一坊大路の路幅は平城宮東南隅（第32・39次）調査で検出した溝心々で23～24 m（8丈）と判明している。三条大路と各々の坪境小路の幅員は発掘資料がなく不詳だが、仮に三条大路を8丈、坪境小路を2丈として求めると、一坪の規模は方400尺となる。次

に、400尺四方の坪内に建物がどのように配置されていたかを知るには、一坪の四至の座標値が必要である。過去2回の調査では、条坊遺構を検出していないので、調査区付近で得ている条坊遺構の座標値、すなわち東一坊大路と二条々間路心の交点、左京三条二坊十坪と十五坪の坪境小路心、および平城宮の朱雀門心の座標を用い、条坊の東西・南北の振れは、平均化した朱雀大路の振れ（ $N0^{\circ}15'50'' \sim 0^{\circ}16'24''W$ ）と同一と仮定した。計算によって求めた一坪の四至の座標は、以下の通りである。

尺 = 0.296 m

A - 146.683.359, - 17.916.635

B - 146.684.367, - 18.049.834

C - 146.551.169, - 18.050.442

D - 146.550.561, - 17.917.243

尺 = 0.2953 m

A - 146.681.566, - 17.916.961

B - 146.682.172, - 18.049.844

C - 146.549.279, - 18.050.451

D - 146.548.673, - 17.917.568

二つの値による計算値の差は約6cmであり、ここでは尺 = 0.296 mとしておく。

**奈良時代前半の宅地割** この時期の検出遺構は、南北棟建物3棟、東西棟建物4棟、塀3条である。桁行が4間から5間程度の規模の小さい南北棟1棟に、東西棟1～2棟程度がグループになるようである。坪内部を区画する施設は未検出なので、建物配置に注目して各々のグループの宅地割を検討してみよう。

SB3007・SB3008の西側柱はほぼ坪の東西2等分線上に位置する。この2等分線を境として東と西とでは、後に述べる南北の分割の方法と関連させると建物配置に若干の差があり、この坪は、中軸線で東西に2分（二行）したようだ。この東西各々をさらに2分（四行）したか否かは中軸線の東側では不詳だが、西側から第1の4等分線が東西棟SB2582の東から4間目の柱筋と重なるので、ここは未分割であったようである。次に南北の分割はどうであろうか。従来の平城京内の調査では、溝や塀によって南北に2・4・8等分する例がある。東市北側の左京八条三坊九坪では、坪の南からほぼ $\frac{1}{4}$ 坪、 $\frac{1}{8}$ 坪、 $\frac{1}{8}$ 坪、 $\frac{1}{8}$ 坪の順に区画していた。この場合、最小単位の $\frac{1}{8}$ 坪とは南北50尺（14.8m）である。

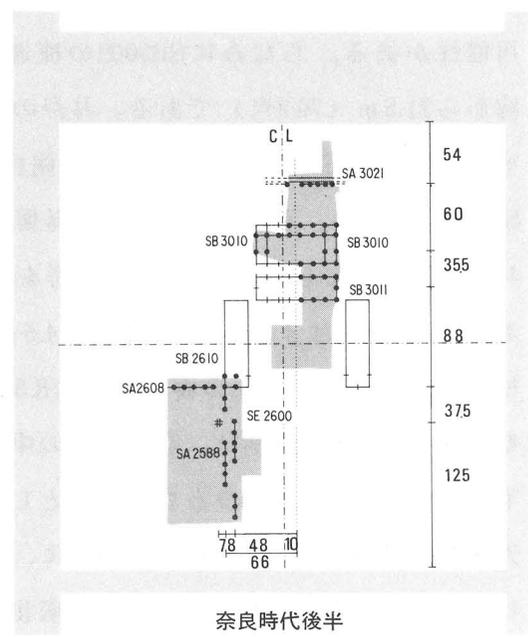
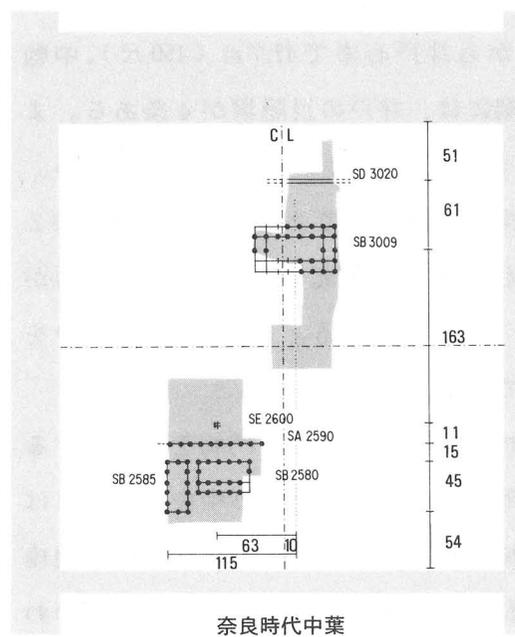
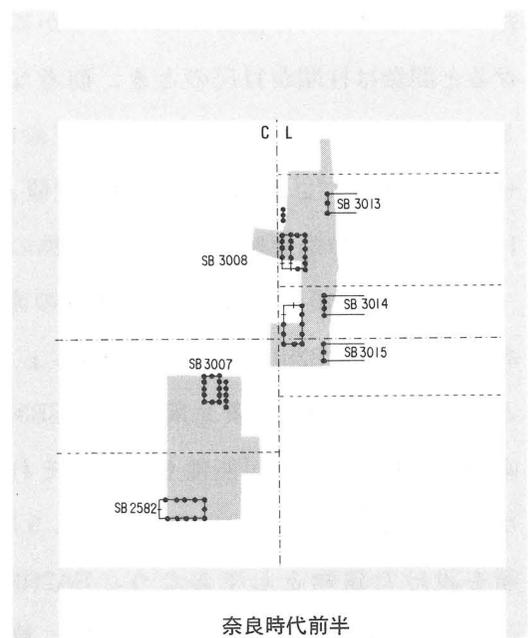
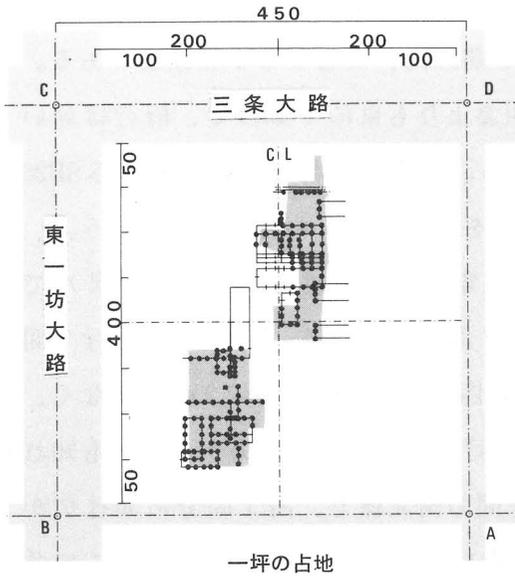
これらをもとに、一坪の遺構配置を検討してみよう。まず、東半部はS B 3008

とS B 3013、S B 3007とS B 3014・3015が組みになるとすると、北から $\frac{1}{8}$ 坪、 $\frac{1}{4}$ 坪、 $\frac{1}{4}$ 坪の順に分割していたことになるし、S B 3013とS B 3008が各々独立の宅地を占めたとすれば、北から $\frac{1}{8}$ 坪、 $\frac{1}{8}$ 坪、 $\frac{1}{8}$ 坪、 $\frac{1}{4}$ 坪の順になる。他方西半部は、8等分線の南から第1の線がS B 2582の棟通りに、同じく第3の線がS B 2605の南1間目の柱位置にくるので、南から $\frac{1}{4}$ 坪、 $\frac{1}{4}$ 坪の順だったのであろう。

このように奈良時代前半の宅地割は、坪を東西に2分割し、さらに南北を8分割する、いわゆる二行八門制を基本とした可能性が強い。

**奈良時代中葉の宅地割** この時期を境に、一坪の宅地割は一変する。坪のほぼ中央北寄りに、7間4間の四面廂の正殿S B 3009が建つ。建物の中軸線は坪の中軸線の東3 m（10尺）の位置にある。建物の前面は広場とする。S B 3009の南51.6 m（172尺）には柱間2.7 m（9尺）の東西塀S A 2590があり、この塀の南には南廂をもつ5間3間の東西棟S B 2580と5間2間の南北棟S B 2585がある。S B 2580の北側柱とS B 2585の北妻はS A 2590の南4.5 m（15尺）で柱筋を揃える。S A 2590がS B 3009を区画する塀として正殿の正面に門を開くのか、あるいはS B 2580・SB 2585を区画するものか明らかではないが、前者の場合、この門の規模を柱間9尺で3間2間と仮定すると、発掘区の東端から2間で門にとりつく。後者の場合、発掘区の東端で途切れる可能性がある。建物の全体配置は未掘部分が多いが、この坪全体がひとつの宅地化したことは、ほぼ疑いがない。

**奈良時代後半の宅地割** 前代の正殿S B 3009は二棟が一体となったSB3010・SB3011に建替え、南北により大規模化する。第一次調査区のSA2590やSB2580・SB2585は廃し、S A 2590の北14.5 m（48.3尺）に新たに柱間2.65 m（9尺）等間の東西塀S A 2608を設ける。この塀の東6間目から柱間が3.3 m（11尺）と広く、またこの塀に直交する塀も、北1間分は柱間が3.3 mと広く、報分では、ここに7間4間の大きな東西棟建物SB2610を復原している。しかし、今調査区内にそうした建物は見い出せず、この復原案は成立しない。ではSB2610が建物なら、どの程度の規模を考えるべきであろうか。S B 2610が東西棟か南北棟かをまず検討してみよう。これは調査区との関係からみて、S B 2610が正殿の西側のみにあっ



図中の数字は、実測値を天平尺  
尺=0.296で除し、近い完数值をとった。

第20図 左京四条二坊一坪の遺構変遷図

たのか、東西の対称位置にあったのかによって規模が変わってくる。図上で割りつけると間数は柱間が11尺のとき、前者なら3間以内、後者なら2間程度である。3間では、SB2610の東妻の位置は正殿の西妻よりも東にくるので、桁行はせいぜい2～3間で、かなり不体裁な配置となる。こうした点を考慮するならSB2610は梁行2間の南北棟とし、東西対称の配置を想定する方が合理的であろう。

次に、SB2610の南妻からSB3011の南側柱までの距離は、23.1 m（77尺）である。これはSB2610の柱間寸法のちょうど7間分にあたる。ただし、桁行7間とすると、SB2610の東北隅の柱とSB3011の西南隅柱の間隔が2.2 mしかなく、両建物の軒が接する可能性もある。それ故桁行を5間と考えた方がよいかも知れない。ここではSB2610は7間ないし5間2間の南北棟で、南1間分に間仕切か廂を設けた建物としておこう。SA2608の南11 mに井戸SE2600がある。この井戸は、平面八角形の蒸籠組の井戸で、桧木の基礎には長方形塼を敷設していた。井戸の掘形から天平末年の土器が出土しているので、設置が奈良時代中葉に遡る可能性がある。ちなみにSB3009の棟通りから井戸心まで47.7 m（159尺）、中軸線から21.5 m（70.2尺）である。井戸の東側には、井戸の目隠塼が4条ある。まず、SA2588・SA2606はSB2610の西側柱に柱筋を揃えた2条の南北塼である。SA2588は4間、SA2606は2間、両塼の間隔は8.3 mである。SA2588の東2.4 m（8尺）にも、やはり南北に筋を揃えた2条の南北塼SA2587・SA2579がある。SA2587は4間、井戸心の東4.5 m（15尺）にある。SA2579は2間分を検出。両塼の間隔も先の塼と同様に8.3 mである。

**むすび** 一坪の宅地割は、奈良時代の中葉にそれまでの二行八門制を基本とする宅地割から、坪全体をひとまとまりとした形態に変化する。坪の中央北寄りには大きな正殿があり、この正殿はのちに、2棟を南北に並列して一体化した大規模な建物に造替する。正殿の東西には南北に長い脇殿が想定でき、全体としていわゆるコの字型の配置をとるのであろう。なお、SB3009・SB3010のように建物の中軸が坪の中軸線と若干ずれることは、左京五条二坊十四坪の2時期の遺構配置にあり、また年代は降るが平安京右京一条三坊九町にも例を見い出す。

本調査は住宅建設に伴う事前調査として実施した。調査地は大安寺町の国道24号線バイパス沿い東側の荒地で、平城京左京五条二坊一坪の中央南端に位置する。当該坪は西を東一坊大路、北を四条大路、東と南を坪境小路で区画されるが、調査地の周囲の水田地割には、それらの条坊痕跡が明瞭な形で遺存する。調査は敷地の中央に東西20m、南北15mの調査区を設定し、一・二坪の坪境小路の検出を目的に調査区を南方に延長し、また西方にも拡張区を設け、全体で480㎡の調査を行った。調査区の層序は、水田耕土・床土の直下に地山の黄褐色粘質土があり、奈良時代の遺物包含層ならびに遺構面は後世に大きく削平されているものと考えられる。調査の結果、掘立柱建物3棟、掘立柱塀1条、土壙3基、溝5条などを検出したが、これらの遺構はA～Dの4時期に区分される。

**A期** 調査区西端で検出した3条の斜行溝（SD01～03）は、ともに北で東に大きく振れ、条坊や条里地割の規制をうけない。出土遺物は皆無であったが、奈良時代の遺構との重複関係や埋土の状況から、古墳時代以前の溝と考えられる。

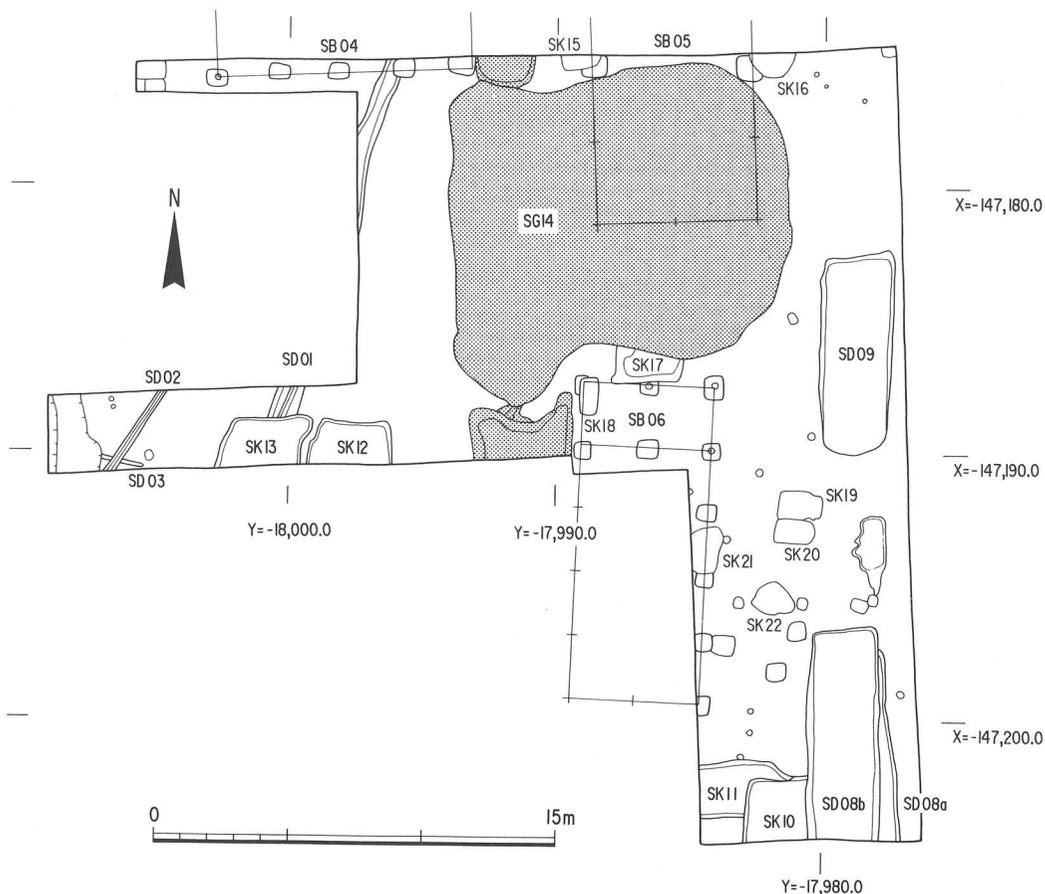
**B期** 調査区の北壁下で検出した掘立柱建物SB04・SB05が該期に属する。SB04は東西棟の南側柱とみられ、8尺等間の4間分の柱穴を検出した。建物方位は北で西へわずかに振れ、0.8×0.6mの方形掘形をもつ。柱穴の掘形埋土から奈良時代前半期の土器が出土。SB05は後述する近世の池によって大半を破壊され、一辺1mの方形掘形を2個検出したにとどまる。柱間は20尺を測るところから、10尺等間の南北棟の東西側柱の一部とみられるが、南妻は池の南には延びずに池の中でおさまる。SB04とは4.5m（15尺）離れ、柱筋をそろえる。

**C期** 掘立柱建物SB06、溝SD08・SD09、土壙SK10～13がある。SB06は5間×2間の北廂付南北棟で、柱間は身舎・廂ともに8尺等間。一辺0.7m前後の方形掘形をもち、一部に径0.2mの柱痕跡が残る。建物方位は北で東に2°25′振れる。SD08b・SD09はSB06と近似した振れをもつ南北溝。幅2.7m、深さ0.2～0.4mの浅い溝である。上部削平前は一連の溝であった可能性が高い。埋土上部に奈

良時代後半の土器が投棄されている。この溝は新旧2時期にわたって掘られており、SD08 bの東にSD08 aの埋土が残る。SK10～13は浅く不整形な土坑。一部重複するものの埋土は近似し、奈良時代後半の土器を多量に出土する。

**D期** 調査区の中央で検出したSG14は、東西13m、南北12m、深さ1.0mの近世の池である。埋土から椀瓦・陶磁器が出土。池の北側西端に受水口、南側に排水口がある。また池の周囲には同時期の土坑SK15～22が掘られる。

以上、今回検出した奈良時代の遺構は、後世に一部を破壊されており、また密度が稀薄で、未掘地の北方もしくは西方に中心があるものと思われる。一・二坪の坪境小路も調査地域外にあり検出できなかったが、坪の東西中軸線上で南北溝SD08・SD09を検出したことにより、 $\frac{1}{4}$ 町に区画された宅地の存在が想定できよう。



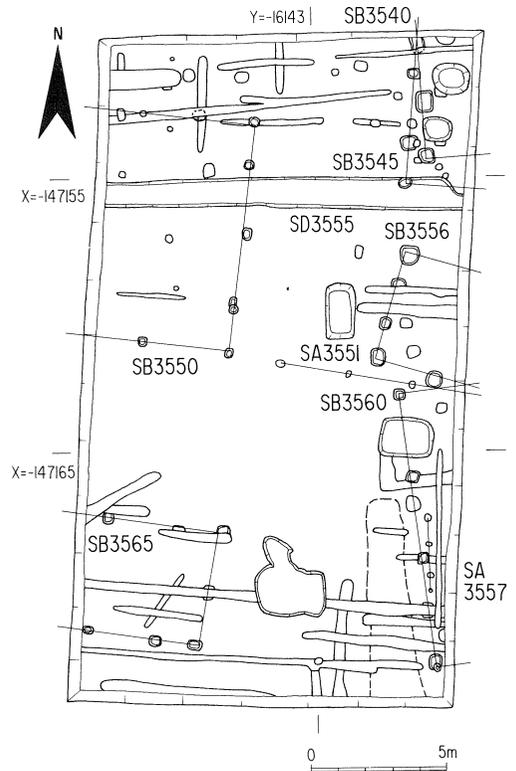
第21図 左京五条二坊一坪発掘遺構図

## 6 左京（外京）五条五坊九坪の調査 第156—33次

本調査は、病院建設に伴う事前調査である。調査地は平城京左京（外京）五条五坊九坪の西南部にあたる。調査面積は約350㎡。今回の調査地の西南に位置する七坪と十坪では、昭和55年に奈良市教育委員会によって調査が行われ、坪境小路や掘立柱建物・井戸など多数の遺構が検出されている（『平城京左京（外京）五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』 奈良市教育委員会 昭和57年）。

調査地の層序は、盛土、灰黒色土（耕土）、暗灰褐色土（床土）、灰褐色土、黄灰褐色粘質土（地山）の順である。遺構は地山面で検出し、掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、東西溝1条がある。その他耕作溝と思われる素掘りの小溝がある。掘立柱建物は、柱掘形の一边が30～40cmと小形で、いずれも方位が振れている。方眼方位より東へ約7°振れるSB3545・SB3550・SB3565、東へ約16°振れるSB3556、西へ約3°振れるSB3540、西へ約8°振れるSB3560の4群に分けられる。東西塀SA3551はSB3550と、南北塀SA3557はSB3540とそれぞれ柱筋がほぼ揃い同時期と考えられる。東西溝SD3555は底部をかるうじて残すのみ。幅1.0m、深さ0.1m。遺物は少なく、灰褐色土やSD3555の埋土から奈良時代の土器・瓦が出土した。耕作溝からも、奈良時代と思われる土師器片が少量出土した。また灰褐色土からは古墳時代の須恵器片や円筒埴輪片も出土した。

今回はまとまった遺構の検出には至らなかったが、七坪・十坪と良く似た状況を呈しており、外京南辺における宅地の様相をうかがうことができる。



第22図 左京（外京）五条五坊九坪発掘遺構図

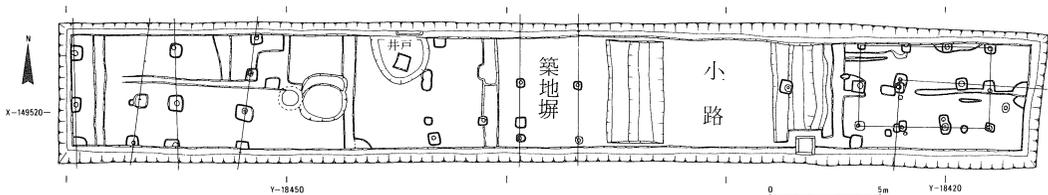
## 7 左京九条一坊三・六坪の調査 第156—2次

左京九条一坊の一帯は現在工場団地となっており、本調査は工場の建替えに伴う事前調査である。調査地が三坪と六坪にまたがるため、坪境小路の位置確認を目的として東西44m、南北6mの調査区を設定した。調査地の土層は、工場用地造成の盛土が約1.3m、その下に旧耕作土・黄褐色砂質土・灰色粘土層約80cmで遺構面に達する。奈良時代の主な遺構は南北小路及びその東西両側溝、築地塀、井戸1基、掘立柱建物数棟、塀などで、近世の井戸3基、土壇、溝が重複する。

坪境小路は側溝心々幅で7.0m、路肩幅4.8m。西側溝は幅2.6m、深さ32cmで西半部は浅い。東側溝は幅2.4m、深さ26cm、両岸部で浅くなっている。東側溝西岸に柱根を残す掘立柱は橋脚で、それに対応する橋脚が調査区北側の未掘地にかかるものと思われる。

三坪の宅地と南北小路の境界は築地塀で区画される。築地塀の本体は削平されて残らず、築地塀築成のための添柱跡1間分がある。添柱の桁行2.5m・梁行2.6mであるから、築地塀基底幅は8尺に推定できる。築地塀の西約1.5mに平行する雨落溝は幅70cm・深さ30cm。井戸は直径2.5m程の円形掘形をもつ深さ約2.5m、縦板組の方形井戸で、板厚約6cm、幅60cmと30cmの2枚を太杓で合わせて一組とし、内側に横棧2段に組んだ簡単な構造をもつ。六坪の宅地には区画のための塀がなく、小路側溝際まで建物が近接し、三坪の宅地と様相を異にする。

なお、九条での朱雀大路は西側溝を検出しており、朱雀大路中軸線を求めて小路中軸線との距離を測ると約139.3m=470尺である。朱雀大路の築地塀間隔を遺存地割から300尺に仮定すると、この塀から小路心までの距離は470-150=320尺となり、三坪の敷地の東西幅は30丈として定められたと推定される。



第23図 左京九条一坊三・六坪発掘遺構図

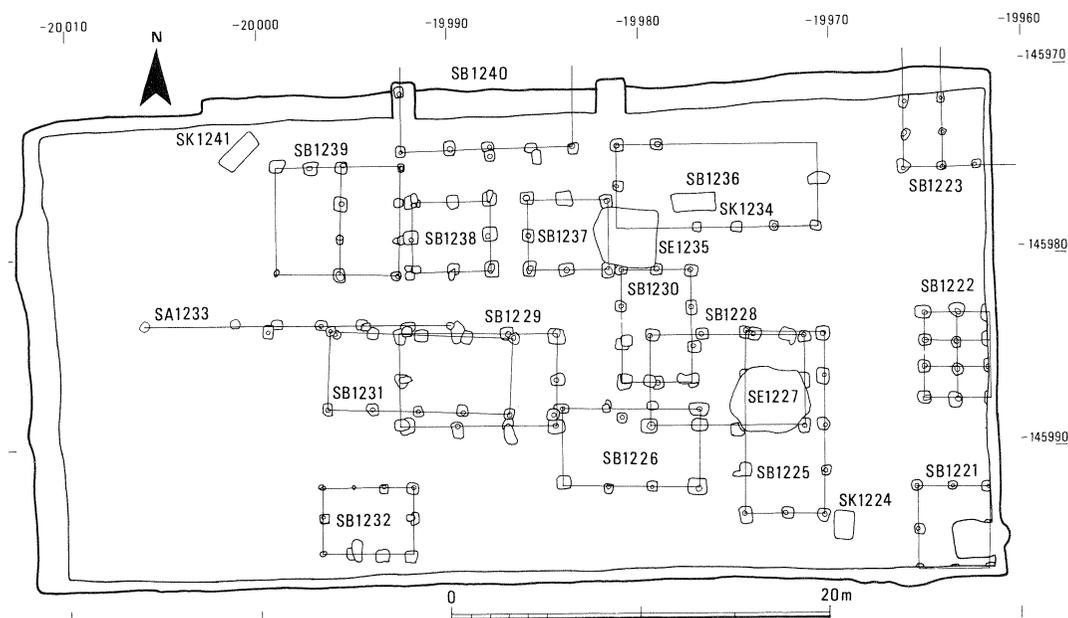
8 右京二条三坊十二坪の調査 第156—10次

本調査は住宅建設に先立つ事前調査である。調査地は平城京右京二条三坊十二坪の南半にあたり、発掘面積は約1340㎡であった。

調査地の層序は、上から盛土、耕土、茶褐色土（床土）、黄白色粘土（地山）の順で、遺構はすべて地山面で検出した。主な遺構は掘立柱建物15棟、掘立柱塀1条、井戸2基、土塋3基などである。なお遺構は後世の水田造成などによっていちぢるしい削平をうけているため、残りは良くない。たとえば柱掘形は検出時の深さが5cm程度のものが多くみられる。全体に遺構が稀薄な一因を、ここに求められるかもしれない。したがって建物配置を考える上で不確定要素が多いため、切り合い関係をまず記しておこう。

掘立柱建物 SB1230 → SB1228 → SB1225 → 井戸 SE1227、掘立柱塀 SA1233 → 掘立柱建物 SB1229 → SB1231、掘立柱建物 SB1230・SB1236・SB1237 → 井戸 SE1235であった。

A 期 平面形が長方形の土塋 SK1224・SK1234・SK1241がある。深さははず



第24図 右京二条三坊十二坪発掘遺構図

れも0.1 m程度で、長辺の方向はまちまちである。

**B 期** 掘立柱建物SB1221・1222・1223・1226・1232・1237・1238、掘立柱塀SA1233が建つ。SB1221は南北棟建物で桁行2間(8尺)、梁行2間(6尺)、SB1222は南北3間、東西2間以上の総柱建物で柱間はいずれも5尺等間、SB1223は西廂をそなえた南北棟建物で6尺等間である。この3棟の建物が南北にならび建つ。SB1226は東西棟建物で桁行3間(7尺)、梁行は2間(7尺)か。さらに二条大路に近く東西棟建物SB1232、桁行3間(5尺)、梁行2間(6尺)がある。掘立柱の東西塀SA1233で仕切られた北にSB1237・SB1238が建つ。同規模の東西棟建物で、ともに桁行2間(7尺)、梁行2間(6尺)である。

**C 期** 掘立柱建物SB1230・SB1236・SB1239がある。SB1230は南北棟建物で、桁行3間、梁行2間の6尺等間、SB1236は東西棟建物で、桁行5間、梁行2間の7尺等間である。SB1239は東に10尺の広廂をとりつけた南北棟建物で、身舎は桁行3間(6尺)、梁行2間(5.5尺)である。

**D 期** 掘立柱建物SB1228・SB1229・SB1240が建つ。SB1228・SB1229は同規模の東西棟建物で、桁行3間(9尺)、梁行2間(8尺)である。約5.1m(約17尺)隔てて、東西にならび建つ。SB1240は東西4間、南北1間以上、おそらく東西に廂をもつ南北棟建物で、桁行10尺、身舎梁行7尺2間、東廂7尺、西廂8尺となると思われる。

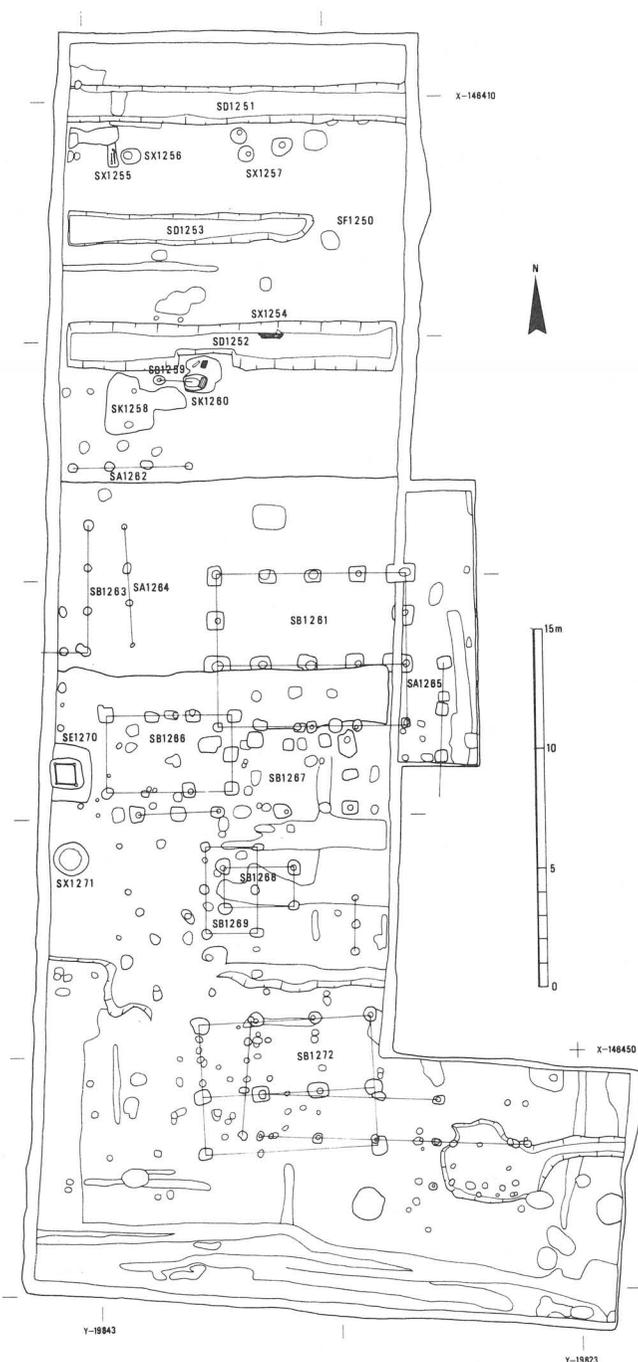
**E 期** 掘立柱建物SB1225・SB1231、井戸SE1235を設ける。SB1225は南北棟建物で、桁行4間(8尺)、梁行2間(7尺)。SB1231は東西棟建物で、桁行4間(8尺)、梁行は2間(7尺)か。井戸SE1235は井戸枠を抜きとっている。深さ約1.4 m。

**F 期** 井戸SE1227をつくる。井戸枠は抜き去られており、埋土に多量の炭をふくんでいた。深さ約1.3 m。

各期の年代は、出土遺物などから、A期を古墳時代、B～F期を奈良時代に定めておくことができる。

遺物の総量はきわめて少なく、わずかに土師器、須恵器をみた程度である。

9 右京三条三坊四・五・六坪の調査 第162次



第25図 右京三条三坊五・六坪（西区）発掘遺構図

マンション建設に伴う事前調査。調査地は「垂仁天皇陵」古墳の北方約110mにあたる。平城京の条坊では右京三条三坊の四・五・六坪にわたり、四・五坪、五・六坪間の坪境小路および各坪内の遺構検出を目的とした。地形的には生駒丘陵から舌状にのびる微高地の東端部にあたり、南西が高く、北と東へ傾斜する。検出した遺構は奈良時代から鎌倉時代のもので、掘立柱建物10棟、塀10条、井戸3基、溝5条などがある。

西区 SF1250は五・六坪の坪境小路で、南・北両側溝にあたるSD1252・SD1251は幅1.5～2.0mの素掘溝。側溝間心々距離は約10mである。建物のうち南廂付東西棟SB1261（身舎4間×2間）が最も大きく、他のSB1266・SB1272等

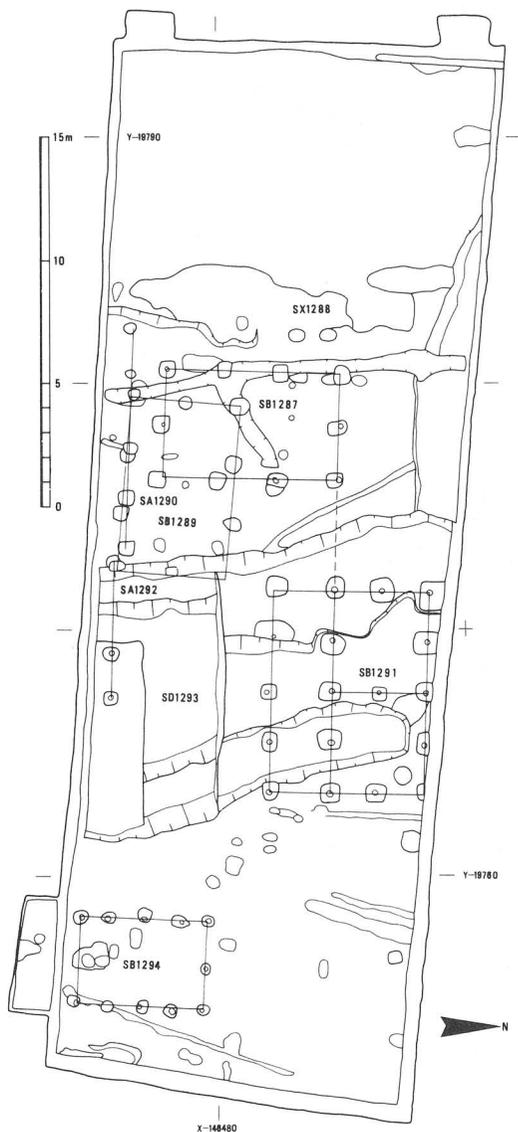
いずれも小規模な建物である。

井戸SE1270は方形掘形内四隅に角柱を立て、桼板を落しこんだ丁寧な作りのもので、桼内出土遺物から奈良時代末期に廃絶したことが知られた。SX1271は円形掘形内に須恵器大甕を据えたものである。

**中央区** 中央で検出した南廂付東西棟SB1291が主屋となろう。身舎4間×2間で中央に間仕切柱がある。西南にあるSB1287は3間×2間の南北棟で、北妻柱筋がSB1291の入側柱筋と揃い、方位も一致するため脇屋とみる。すぐ南に東西塀SA1290がある。重複する東西棟SB1289は切り合いで古い。東南隅で検出した南北棟SB1294は平安時代に下る。発掘区西端のSD1275は四・五坪境小路東側溝であろうか。

**東区** 中央部を幅約20mの南北溝SD1300が縦貫する。無遺物のため年代は決め難い。

**出土遺物** SD1252、SE1270および西区北半の整地土層を中心に多量の遺物が出土した。軒丸瓦6（6279A・6311F・6314A型式各1、6316型式2、不明1）、帯金具（巡方）2、木製柄杓のほか大部分は土器類である。SD1252およびその南方に広がる整地土層から出土した土器類の大半は奈良時代後半期のもので、遺構群の中で奈良時代前半期に遡るものは少ないと思われる。SD1252から墨書土器「厨」が出土している。



第26図 右京三条三坊四・五坪（中央区）発掘遺構図

大和郡山市九条町132番地ほかで行った大和郡山市塵芥焼却場建設に伴う事前調査である。調査期間は昭和60年2月20日から3月2日まで、発掘面積は324㎡である。

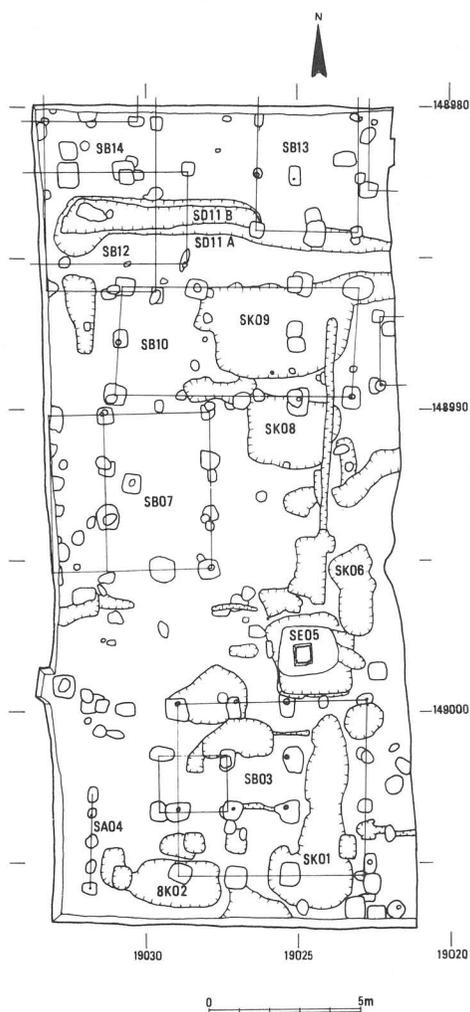
調査区の基本的な土層は上から水田耕土、床土、中世遺物包含層とつづき、その下が奈良時代の遺構検出面となる。

検出した主な遺構には井戸1基、掘立柱建物10棟、溝3条、土塋多数がある。

井戸S E 05は一辺60cmの方形縦板組、深さ2mある。建物は柱間1.8m（6尺）前後のものが多い。また土塋、溝には焼土や炭化物を含むものも多くみられる。

出土遺物は大部分が土器で、瓦はごく少量である。井戸からは曲物、折敷、櫛、刀子、鉄鏝、フイゴ羽口、骨など多様な遺物が出土した。土器には漆の付着したものが少数含まれる。軒瓦には軒丸瓦6225 C 型式、軒平瓦6646 B 型式がある。

本調査区は平城京右京八条一坊十四坪の中央北寄りにあたるが、東接地は大和郡山市教育委員会が調査しており、漆・鍛冶工房関連の遺構・遺物が検出されている。本調査区も通常の宅地遺跡とは様相を異にする点もあり、それと一連の遺跡である可能性が強い。



第27図 右京八条一坊十四坪発掘遺構図